

資料組織法の現在

渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)

0. はじめに

司書の専門性と資料組織化

「資料と人を結ぶ」専門性のコアの一つ

目録作成の変容 (標準化、ネットワーク化、アウトソーシング)

「日常の作業」から離れて、必要な知識は何か?

目録と目録規則の動向

目録そのもの (OPAC)、目録ツール (目録規則など)、目録作業

1. インターネットの時代と図書館目録

図書館目録にとってのインターネット¹

- ・ 目録の可能性を広げる福音： 当初の空気
書誌情報流通の拡大 (低コストで手間もかからず)
利用者への提供、作成のための共有
新たな操作対象 (ネットワーク情報資源)
困難さはあるが、目録の「障地拡大」の可能性 (「メタデータ」を)
- ・ 目録の持続可能性への脅威： 最近の空気
ネットワーク情報資源の爆発的増大
メタデータ作成は追いつかない (相対的な「障地縮小」)
検索エンジンの進歩 (Google など)
生産 (出版界)・流通 (Amazon など) 段階のメタデータ (書誌情報)
図書館界の制御の枠外で、ネットビジネス用の書誌情報が大量に露出
大規模デジタル化プロジェクト (Google ブック検索など)
書誌コントロールの前提条件の変化
目録は情報発見の “one of them” に

「目録の危機」論議と将来展望²

- ・ 2005 年ごろから、米国の研究図書館界を中心に
目録の相対的な地位低下 (前項)
進歩のない OPAC (次項)

¹ 渡邊隆弘「書誌コントロールの将来をめぐる論点：LC の WG 報告書とわが国での検討状況から」『情報の科学と技術』58(9) 2008.9. p.430-435 *CiNii で全文一般公開

² 注 1 のほか、以下も参照
渡邊隆弘「研究図書館目録の危機と将来像」『カレントアウェアネス』290, 2006.12

作成・維持のコスト： 基本的に人力のデータ作成
生き残りのためには？

機能強化、利用開拓、他のシステムとの融合、効率化...

- ・米国議会図書館「書誌コントロールの将来 WG」報告書 (2008.1)³など
- ・日本でも (詳しくは、あとで)

国立国会図書館： 新しい書誌データ作成・提供方針 (2008.3)

国立情報学研究所： 次世代 NACSIS-CAT のあり方 (2009.3)

2. 「次世代 OPAC」の動向⁴

「次世代 OPAC」の探求

- ・米国を中心に 2006 年ごろから続々と
- ・「次世代」というコトバ

C.R. Hildreth の OPAC 世代論 (1984)

第一世代 (当時でも古い ~ 1970 年代)	カード目録の模式
第二世代 (当時の主流に 1980 年代)	キーワード検索、ブール演算
第三世代 (次世代)	典拠によるアクセス、フリーテキストと統制語検索の統合、日常語による探索表現、個別的な注文に応じた表示、内容に応じた自動エラー訂正・ヘルプ表示、提供データの拡張 (抄録/索引、多数・多種のデータベースとの連結)

こうした見通しが「絵に描いた餅」のままで OPAC は長らく停滞

「過去 25 年以上にわたる OPAC に関する多くの研究・論文にもかかわらず、図書館目録の検索における利用者の成功を改善するオリジナルなアイデアの多くはいまだ実装されていない。皮肉なことに、これらの技術の多くは現在 Web 検索エンジンに見いだせる。」(Yu and Yuang, 2004)⁵

こうした反省の上にたった試みの総称

現在は、標準的な機能が収斂されつつある段階

次世代 OPAC で重視されている主な機能

- ・いくつかの背景

Google に学ぼう

Amazon その他に学ぼう

図書館目録の伝統資産を再生しよう

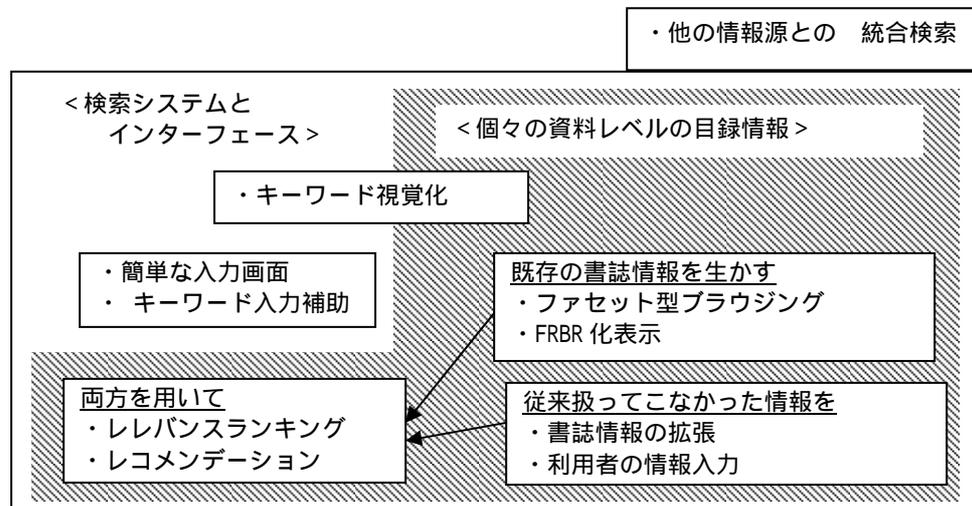
³ タイトルは“On the Record”。ごく最近、NDL から日本語訳が公開されました。
<http://www.ndl.go.jp/library/data/kokusai.html>

⁴ この項の話は、こちらをもとにしています。
渡邊隆弘「次世代 OPAC」への移行とこれからの目録情報」『図書館界』61(2), 2009.7. p.146-159
次世代 OPAC の諸機能については、以下のものもわかりやすく参考になります。
工藤絵理子, 片岡真「次世代 OPAC の可能性 その特徴と導入への課題」『情報管理』51(7), 2008.10. pp.480-498 *J-STAGE で全文公開
久保山健「次世代 OPAC を巡る動向：その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58(12), 2008.12 pp.602-609 *CiNii で全文公開

⁵ Holly Yu & Margo Young. “The Impact of Web Search Engines on Subject Searching in OPAC”
Information Technology and Libraries, 23(4), Dec., 2004. pp. 168-180

・具体的に

- (1) 簡略な検索画面
単一の入力ボックスなど
- (2) キーワード入力補助
スペルチェック、自動補完、語幹処理、候補リストなど
- (3) 関連キーワードの視覚化
関連語のクラウド表示など
- (4) レレバンスランキング
それらしいものを上位に表示 (入力語に対する関連度を判断)
- (5) 書誌情報の拡張 (増強)
表紙画像、内容紹介など
- (6) ファセット型ブラウジング
複数の視点で検索結果を分類して提示 (絞り込みの候補メニュー)
- (7) FRBR 化表示
同一「著作」の様々な版をまとめて、整理された表示
- (8) 利用者による情報入力
タグ、レビューなど
- (9) レコメンデーション
関連資料の提示
- (10) 他の情報源との統合検索
雑誌記事 DB など



・日本では...

本格的な導入例はまだない

いくつか注目されるものも (外部データの検索など)

例) 市川市立図書館で青空文庫が検索可能 (2008.6 ~)

3. 目録規則の変革⁶

目録規則の動向

- ・ 1990年代後半以降の活発な改訂は 2000年代半ばまでに一段落
ISBD (国際標準書誌記述) AACR2 (英米目録規則) NCR が順次改訂
改訂は、主に特定の章⁷
 - 「電子資料」: 旧「コンピュータファイル」
リモートアクセス資料への対応など
 - 「継続資料」: 旧「逐次刊行物」
適用範囲の拡張など
- ・ 『日本目録規則 1987年版改訂3版』(NCR87R3)
2006年刊行(実質改訂は2005年)
第13章「継続資料」(旧「逐次刊行物」)
逐次刊行物 + 更新資料(WWWページ、加除式資料など) = 継続資料
タイトル変遷の規定を見直し(「重要な変化」と「軽微な変化」)
第2章「図書」、第3章「書写資料」
和古書・漢籍に関する規定(はじめての本格的な標準化)

より抜本的な見直しへ

- ・ 「目録の危機」に対応するには
 - 「付加価値性」が必要
 - 「開放性」も必要
- ・ 全体を抜本的に見直す必要
カード目録時代の枠組み 章ごとの改訂では限界
OPACに対応した規則に
 - 「記述」だけでなく、「標目」も抜本的に媒体の多様化、複合化に対応した規則に
 - 「資料種別」による章立てに限界図書館外の世界との「相互運用性」
孤立しては使ってもらえない
- ・ 1997 FRBR (書誌レコードの機能要件)
今後の目録の基礎となる「概念モデル」
- ・ 2003~ IFLA「国際目録原則」の策定作業
「パリ原則」(1961)に代わる新しい原則
2009.2 完成
- ・ 2003~ AACR (英米目録規則) 抜本改定作業
RDA という新しい名称になって、2009.11 完成予定

⁶ 渡邊隆弘「目録法の再構築をめざして」『図書館雑誌』103(6), 2009.6. p.376-379

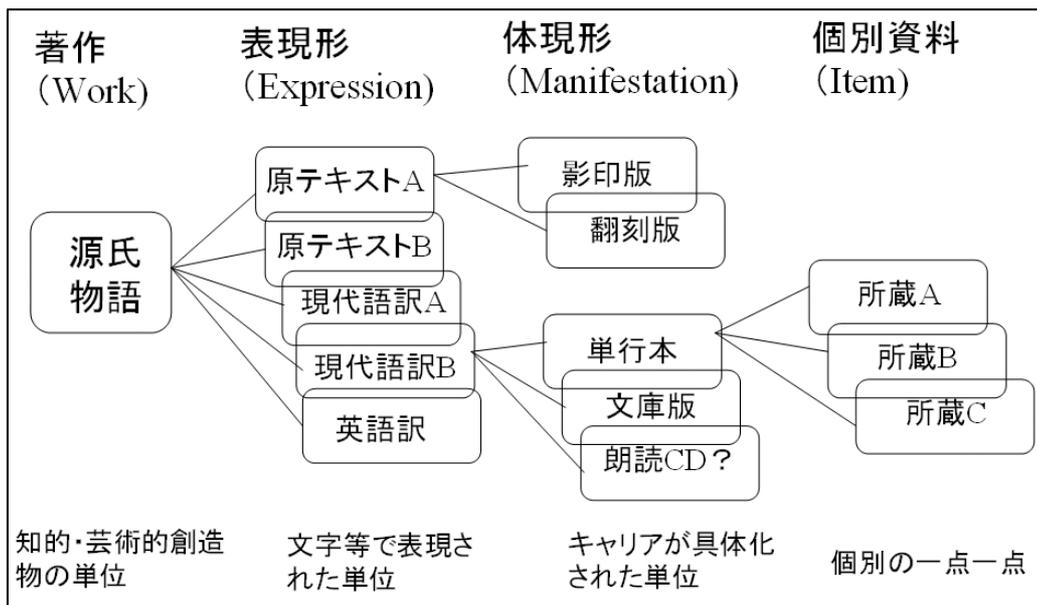
⁷ 以下の図書が背景や問題点を知るのによい。ただし、いずれも NCR 改訂案段階での検討会記録であり、NCR の条項細部は最終版と異なっているので注意。

日本図書館協会目録委員会編『電子資料の組織化』日本図書館協会, 2000

日本図書館協会目録委員会編『継続資料と和古書・漢籍の組織化』日本図書館協会, 2005

FRBR (書誌レコードの機能要件)⁸

- ・今後の目録規則の基礎になる枠組み
- ・Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)
 - 「書誌的世界」の「概念モデル」・・・「実体関連モデル (E-R モデル)」
 - 「実体」「属性」「関連」で情報を整理
 - 書誌レコードの各項目は何のためにあるのか？を考え直す
- ・資料を4段階の枠組み (抽象 具体) で把握： 4つの「実体」
 - 「著作 (Work)」・・・知的・芸術的創造物の単位
 - 「表現形 (Expression)」・・・文字、音声等で表現された単位
 - 「体现形 (Manifestation)」・・・キャリアが確定し、具体物となった単位
 - 「個別資料 (Item)」・・・個別の一点一点
- ・これまでの「著作」と「版」の考え方を発展
 - 「コンテンツ」と「キャリア」(内容的側面と物理的側面)の問題
 - 「表現形」を新たに設定して整理
- ・さらに「個人」「団体」「家族」「物」「出来事」「場所」「概念」との関係
 - 著者名典拠や主題情報にあたるもの



⁸ 和中幹雄ほか訳『書誌レコードの機能要件』日本図書館協会, 2004.3. 121p
WWW 版全文 <http://www.ifla.org/files/cataloguing/frbr/frbr-ja.pdf>

RDA : AACR2 (英米目録規則第2版)の後継規則

- ・ Resource Description and Access (資源の記述とアクセス)
- ・ 完成目前 (2009.11 刊行予定)
 - 2003 年以降、「AACR3」改訂の活動
 - 紆余曲折の中で、名称も変更
- ・ コンセプト : デジタル世界のためにデザインされた新たな標準
 - あらゆる内容 / 媒体の情報資源に対応 (柔軟性と拡張性)
 - データベース環境 (情報組織化環境) の変化に対応 (効率性と柔軟性)
 - 図書館中心だが、他のコミュニティとの接合も
 - 従来目録法との継続性も意識 (伝統の基礎の上で、FRBR モデルの適用)
- ・ 従来規則とは全く異なった構成
 - これまでの目録規則の構成

記述の部 総則、図書、地図、... (資料種別ごとに章立て) アクセスポイント (標目) の部 選定に関する規則 統一標目の形式に関する規則 (個人、団体、統一タイトル...)
--

RDA の構成 (FRBR に密着)

セクション1: 体現形および個別資料の属性 1章 一般的ガイドライン 2章 体現形および個別資料の識別 (タイトルをはじめ、従来目録の中心部分にあたる) 3章 キャリアの記述 (従来目録の形態事項にあたる) 4章 取得とアクセス情報の提供 セクション2: 著作および表現形の属性 5章 一般的ガイドライン 6章 著作および表現形の識別 (従来目録の統一タイトル等にあたる) 7章 著作および表現形の付加的属性の記述 セクション3: 個人、家族、団体の属性 8章 一般的ガイドライン 9章 個人の識別 (従来目録の個人標目にあたる) 10章 家族の識別 11章 団体の識別 (従来目録の団体標目にあたる) セクション4: 概念、物、出来事、場所の属性 12~16章 * 16章 (場所の識別) 以外は、刊行後に展開予定	セクション5: 著作 ~ 個別資料の間の主要な関連 17章 一般的ガイドライン セクション6: 資料と個人、家族、団体との関連 18~22章 (従来目録の「標目の選定」にあたる) * 一般的ガイドラインと著作 ~ 個別資料の4章 セクション7: 主題の関連 23章 刊行後に展開予定 セクション8: 著作 ~ 個別資料の間の関連 24~28章 (「その他の関連」にあたる部分) * 一般的ガイドラインと著作 ~ 個別資料の4章 セクション9: 個人、家族、団体の間の関連 29~32章 (典拠レコードの「をも見よ参照」にあたる) * 一般的ガイドラインと個人・家族・団体の3章 セクション10: 概念、物、出来事、場所の間の関連 33~37章 刊行後に展開予定
--	--

・ RDA の特徴

FRBR に密着、典拠コントロールの重視、機械可読性の向上、...など⁹

⁹ くわしくは、注6)「目録法の再構築をめざして」

NCR 20XX年版

・ ???

4. これからの目録業務¹⁰

米国議会図書館「書誌コントロールの将来WG」報告書“On the Record”(2008.1)

- ・ 外部データの活用による目録作成の効率化
出版流通段階のメタデータをもっと利用
- ・ 目録作業に関わる協働の推進
議会図書館だけに任せず、責任の分散化
- ・ ユニーク資料(貴重コレクションなど)の組織化に注力
通常の図書に関わる作業を効率化して
- ・ 典拠コントロール作業の重視
書誌記述に関わる作業を効率化して

「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針(2008)」(2008.3)¹¹

- (おおむね5年間を対象期間とする方針)
- ・ データの開放性、情報検索システムの機能向上
- ・ 多様な情報源へのシームレスなアクセス
- ・ 書誌データの有効性を高める見直し(構造、標準など)
- ・ 作成の効率化・迅速化、外部資源の活用
2009年1月から、民間MARCデータを利用
(書誌記述のみ。典拠・主題作業は従前どおり)

「次世代目録所在情報サービスの在り方について(中間報告)」(2008.3)¹²

(国立情報学研究所「次世代目録WG」による次世代NACSIS-CAT検討)

- ・ データ構造を中期的に見直し
- ・ 電子情報資源に対応する仕組み
目録DBとは別に「電子情報資源データバンク」を
- ・ 外部の書誌データをもっと活用
例えば、民間MARCを今以上に活用
- ・ 共同分担目録方式の「最適化」
一定程度の集中化:「目録センター館」構想のアイデア
インセンティブモデルの導入も検討の余地

今後のデザイン

- ・ 効率化要請の中で、「付加価値性」「開放性」をどう担保していくか

5. おわりに

¹⁰ 注1)「書誌コントロールの将来をめぐる論点」

¹¹ <http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html>

¹² http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg_interim.html